

石に寝られもせず、いつしか夜は明けぬ、  
夜明の五時頃、やうく梯子段を降り來りし一作の顔を見るや否、待ち兼ねしお歌の  
額越

「おかけさまで今日は朝寝坊せずに済みましたよ、お早う御坐います」

「は、は、は、眞實、おかけさまだ、朝早く起きた事はないが宵から起きて居た事はある  
といふ洒落と一般、餘儀なく無理に目を開いて居たからだぜ、一旦、横に寝て早起  
の出来る人間ぢやアないからね、どうだ朝の早いのは氣持の宜いもんだらう」

「ところが、さう宜くもありませんよ、貴君と違つて妾等は昨日、晝寝をして置きま  
せんでしたからね」

「昨日しなければ今日するが宜い、どっちへ勘定を付けても、中間一晚のこつた、お  
い常公、顔を洗ひたい、まだ臺所は起きまい、水を汲んでくれ」

「はい」

「何といはれても常ちやんは此ごろ、たゞはいくとばかりで、少しも妾の味方をし  
なくなつたよ、うかく人の世話を、するもんぢやアないね」

「あら、まア、そんな皮肉な事を」

「ほ、ほ、冗談だよ、早く水を汲んでお上げ、ついでに顔も洗つてお上げ」

一作、おもはず苦笑ひしながら、小常に水を取らせ顔を洗ひし後、此方へ立戻れば、  
お歌その間に二階の用を済ませて降り來りぬ、

「きのふ横濱から引つゝいての夜明しで、よほど勞れたと見えて今、あのまゝ臥床を  
展べて來ましたよ、今日は晝前まで起きられない筈ですから、もし俵が迎へに來れ  
ば稻田さん貴君、どこへでも乗つて往つて下さいとさ、どツか出る御用があるんで  
すか、下宿屋へ歸るだけなら出ないで、今夜もう一晚、お宿りなさいな、ねエ常ち

やん」

「いや、實は用があるんだ、神田へ歸るばかりでない、もし迎ひの俵が來れば、ちよいと借りよう、是非とも木村さんのため内々で逢はなければならぬ女があるんだよ、しかし初對面の乃公を知らないから定紋の付いた俵を證據に乗って行くんだ、は、は、どうも辛い役目だ、君に對してねエ、はッはッはッ」

この刻むが如き笑ひ聲を發する時は、一作の胸中、何等か人知れぬ得意の快心事を含める筈なり、

今までは嚙んで吐き出す如くいはれながら、身を捨鉢の自棄に押し込みしが、このごろは嬉しく吐られながら世話女房の氣で來る小常、戸障子の隙間より吹き入る大道の砂埃さらりとせる下宿屋の二階も、しんみりと落ち付いて居心地よく、一作が晝寢

の枕頭に坐しぬ、

ゆうべの夜明しは我身も同じ事ながら、揺り起しも得せず、宿の下女に聞けば正午前十時前後に歸り來りしといふ一作が午後の三時過、やうく目を開いて動き出しぬ、

「おや、お目覺」

一作、寢ながら手足を伸ばして、ついでに滿面の大欠伸、

「いつの間に来たんだ」

「二時間ほど前」

「ぢやア二時間以上、ぐツすと寢込んだ勘定だな、その間、ほんやりと汝、何をして居たい」

「別に何もする事がありませんから、じつと貴君の寢顔を見て居ましたよ、ほ、ほ、ほ」

「自分で見た事アないが、乃公の寢顔は格別また美しいさうだな」

「自分で分らない筈の寝顔を、どこの誰が傍で見居て、さう美しいと言ひましたの」  
 「いや、どこの誰といふ一人や二人の評判ではない、こりやア世間一般の風聞だよ、  
 はッはッはッ時に木村の老爺、あれから、どうしたい」

「木村さんより貴君こそ、あれから、どうなすつたの、築地を出たのは、今朝の六時  
 前でせう、そして今こゝで聞けば十一時ごろ歸つたといふぢやアありませんか、五  
 時間ほど全體、どこへ往らしつたんです、乗つて出た俵は上野の山下で、お歸しな  
 すつたさうですネエ、上野邊に何の御用、今ごろ櫻はなし、池の端の蓮でも見るに  
 は少々まだ時候が早過ぎるでせう、その外は待合ばかりで油断のならない物騒な土  
 地がらすよ、いくら夜ぢやアなくつてもさ、おまけに歸つて直ぐ横になつて、さ  
 もく、勞れたらしい晝寝の工合、どうも怪しいこと、ゆうべの夜明しは貴君ばかり  
 ぢやアないんですよ、第一また過日の四五日が變だワ、萬事無精な貴君が、わざく

新橋のステーションから端書を出して、場所もいはず只、東海道筋に居たと仰しや  
 るが、どういふ用で、どんな東海道か知れたモンではない、同じ東海道でも廣重の  
 繪を張つた二枚折の薄闇い蔭ぢやアなくつて、考へて見れば見るほど、不思議に怪  
 しい事が重りますよ、今朝だつて出がけに、是非とも木村さんのため内々で逢はな  
 ければならない女があると仰しやつたのは、實は木村さんのためでなく、また一時  
 の洒落に言つた冗談ばかりぢやアないんでせう」  
 何といはれても騒がれても平氣に横を向いて空吹く風の一作、たゞ大口あいて笑ひ出  
 しぬ、

「はッはッはッ、握り拳で三百萬圓の荒療治よりも、熱の出た女一人の介抱が難かし  
 いわい、汝のいふ事ばかり聞くと、まるで乃公が外に情婦でもあるやうだな、はッ  
 はッはッ、凡そ世の中の見當違ひも、こゝまで美事に外れると面白いね、少しは滿

足な料簡で考へて見ろよ、大體この乃公が外で不安心な男に出来てるかい」  
 「だって、うかく安心して居られませんよ、現に妾が」  
 「汝は例外だよ、世間の女ア汝ほど物奇心に恍惚ちやア居ないよ」  
 「ぢやア何故、今まで貴君の口から聞いた事のない、妙な方角の違つた上野邊で俵を降りて、池の端のやうな物騒な土地を五時間も、どういふ大切な御用があつたんです」

「困つた女だなア」

「それ御覽なさい、かう圖星を覗つて切り込めば、すぐ困るでせう」

「は、は、は、困りやうが違つてるよ、實はね、家を捜しに歩いたんだ」

「家、誰の家です」

「夜明しの朝だ、わざく睡い目を剝いて他人のため貸家札を見付けに歩く奴がある

かい、乃公の住む家さ」

「おや、變ですこと、過日あればほど木村さんに勧められても確く御辭退なすつた貴君でせう、また妾に對つても當分持たないと仰しやつたでせう、その貴君が急に、いよく變ですな、探したか探さないか、まだ目に見えない家の事は兎に角、東海道の四五日は全體、どこに在らつたの、どんな御用でしたの」

「東海道の一件はね、家を持つてから自然と、わかつて来るよ、また目下の境遇上さらに必要を認めなかつた乃公が急に其必要を認めて、俄に家を探し歩いた事情も自然、今に現はれて来るからね、女の智慧から割り出す小理窟で、ぐづくいふに當らない、黙つて見て居ろ、どうせ世間普通の注文通りに生れて来ない乃公のすることだ」

「何も別に妾が、ぐづくいふ理由ぢやアないんですがね、ほ、ほ、ほ、眞實、家をお

「持ちなざるの」

「持つよ」

「貴君、お一人で」

「馬鹿、乃公が家を持つた以上、汝を築地へ預けて置けるかい」

「あら、また吐られたよ」

いつも頭ごなしに吐られながら、今日の吐られやうこそ小常の身に取って、いかに嬉しく楽しかりしぞ、

今日の社會に對する自己の程度と自己の境遇上、さては將來に於ける希望と前途に於ける抱負上、いづれの點より打算するも、いづれの點より割り出すも、現在の稻田一作として到底こゝに一家を成すべき筈なく、まして俄世帯の臺所に小面倒なる鍋釜を

据る借家住居の門口に志も遂げざる表札を掲ぐる事、殆ど一種の恥辱を暴露せる苦痛に等しけれど、例の木村周藏に人知れず託されたる例の活動上、俗世間の耳目に自己の存在を確實ならしむる必要上、餘儀なき事情に迫られ、己むを得ざる一時の方便に支配せられ、いよく一家の名前人となりぬ、

されど、同じ家を持つとなれば、たゞ一時の方便にもせよ、暫しの假住居にせよ、ベシキ臭き門戸の並ぶところは嫌なり、朝夕に馬車と自動車の出入するところは面白からず、書生のゴロつくところは蒼蠅し、いやに白粉臭きところは快からず、妙に風流がるところは氣觸なり、繁華雑沓の地は徒らに家賃高く塵埃深く、さりとて九尺二間の裏長屋にも住めず、たゞ百萬の市中に上野の山あり不忍の池ありて、加之も交通の便利を缺かぬ點に方角を定め、谷中清水町の入口に幸ひの借家を見付け出しぬ、元は美術學校の教師が故郷より親の遺産を分與されて建築せりといふ家屋、今その教

師は死して月に二十五圓の家賃は國へ歸りし未亡人の収入となり、借家といへど實は借家普請でなく、あまり廣からねど家も庭も流石に行届いて、十疊の客座敷、八疊の書齋、六疊と八疊の居室、四疊半の下女部屋、三疊の立關口、湯殿あり物置あり、もしこれが繁華の市中ならば五十圓でも廉いとは近處に居る差配人の口上、なるほど高くはなし、

いよく、此家と定めし一作、竊に木村周藏を關東銀行の應接所に訪うて、以上の大略を語りながら例の鼻頭に小皺を寄せぬ、

「どう考へても今この一作が家を持つなにかア、殆ど滑稽ですな、は、は、は、しかし案外、庭も樹木もあつて、ちよいと居心地の宜かりさうな家です、無論、元來が借家建築でもないからですがね、大手の上野まで出れば電車の便あり、山越に横ぎれば根岸の一端を通つて淺草の繁華あり、搦手へ脱け出せば團子坂から本郷小石川、少

し遠出すれば田端から王子邊の散歩も出来るし、第一また手近に谷中の墓地もありますから人間の終局、いつ何時、まるつても始末が早いですよ、あれなれば大丈夫、安心して脳味噌を擦り潰せますね、はッはッはッはッ」  
 どうしても稲田は稲田、どこまでも一作は一作式なり、

いよく、稲田一作の四字を門戸の表札に張り出せしが、本人の眞意いまだ家をなさざる此家、いかなる必要に應じて如何なる効果を産み出すべきや、實は心ならざる此表札、どれほどの餘儀なき事情に應じて幾何の價値を世間に示すべきや、無論、いふまでもなく萬事の費用一切は木村周藏の懐中より出でたり、

一作、木村と小常とお歌の三人に對ひ、じろく、その顔を見廻しながら、笑うていふ、  
 「兎も角まア木村さんの御世話で家は出來たが、さて厄介な事には平駄張つて居て其

日の濟む居職と違ひ、勢ひ多く出勝の筈だから、どうしても空巢守の人間がなくては困る、のみならず、まさか辨當を取つても食へずさ、やはり自分の臺所で飯も炊いたり菜も煮たり、それには差當つて手近の小常を脊負ひ込むより外ありませんな、どうせ間には合ふまいが、見ず知らずの他人より無遠慮に吐り飛ばす事の出来るだけが取柄ですよ、はッはッはッ」

何といはれてもコキ下されても、たゞ嬉しさに半以上は夢中の小常、されどお歌は眉を顰めて小膝を進めぬ、

「稻田さん、今更ら何ですよ、貴君が家を持つて小常を脊負ひ込むも込まないもありませんかね、よくまあ、そんな事がいへますよ、さつさと連れて往つて下さい、しかし小常一人では少々かはいさうですよ、なるほど本人は一生懸命に働く覺悟でも、まさかね、是非とも臺所の用だけは、外から下女を一人、置いて貰はないと困りま

すッ」

小常、木村の手前もあり、そつとお歌の袖を曳きぬ、

「なアに妾、一人で澤山だよ、どんな事でも、するからさ」

「無効だよ、黙つて、おいで、どうせ出来ないへまな事して朝から晩まで吐り飛ばされるより、今こゝで極めて置いた方が宜いからさ、さうぢやアありませんか稻田さん、九尺二間の裏店なら兎も角、あの家で夫婦つきりは却つて變ですよ、近處に軒並びはなし、ちよいと夫婦、散歩に出るつても戸を閉めたり鍵を懸けたり、萬事に手数が多くつて不自由ですよ、澁ッ皮の剥けた小間使でも置けば小常が氣を揉むでせうが、山出しの丈夫な御飯炊は是非、入るでせう、ほッ、ほッ」

一作、靜に首肯きぬ、

「なるほど」

「なるほどッて稲田さん、口ばかりぢやア困りますよ、早速、妾が出入の慶庵を呼びにやりますから、全體、こんな事は黙ッて始めに極めて置いても宜い筈ですが、妙に皮肉な貴君だから、わざと馬鹿正直に念を押すんですよ」

「いや考へて見ると、それに及ばない、御親切は有難いがね」

「おや、そろそろ始まつたよ」

「何、實はね、下女も出来てるんだ、あの家を約束する時、差配の奴に頼んで置いたよ、ことし十九で幸ひ房州出の本場女があるさうだ」

「あるなら、あると何故、人の心配しない最初に、さう仰しやらないんですよ、貴君ア妾の心配するのが面白いんですか」

「は、は、さう取ッてはいけない、つまり萬事が木村さんの世話だからね、その木村さんの面前で聊か差控へたのさ、下女までは贅澤過ぎて言ひ兼ねたんだよ、實は馴

れない小常を臺所で叱り飛ばしたかアないよ、下女も下女、給金は世間普通の二人前を與へて、なるべく小常に樂をさしてやる覺悟だ、はッはッはッ」

木村周藏は手を拍ッて笑ひ田し、小常は思はず目を拭いての寫し泣き、お歌たゞ一人、ふツと膨れ出しぬ、

「もうく、稲田さんの事は一切、これツきり、これに懲りて御免を蒙りますよ、馬鹿馬鹿しい、いつも妾だけが脊負抛けだよ」

上野の森を軒端に仰ぐ谷中清水町の新世帯、いよく明日といふ其前日の忙がしき、お歌は宵に認めし買物の覺書を手にながら平生出入の車夫三人を四方へ走らせ、小常は只これ夢が夢中に狼狽へ廻りて腰も据らず、骨董類の如き凡て不急の贅澤品は幸ひ有り餘る築地の妾宅より送れど、眼前になくて叶はぬ世帯道具は箸一本まで新たに



整へて、まだこれが足らぬ、あれが入るといふ大騒ぎの中に、肝心の主人公たる稲田一作、いづこへ行きしやら、其日の朝、ぶらりと立ち出でしまゝ、影もなし、勸工場より俵を飛ばして歸り來りしお歌、小常の顔を見るや否、

「稲田さん何處、ちよいと急に相談せねばならない買物が出來たよ」

「すみませんねエ、實は妾、先刻から氣が氣ぢやアないんですよ、鐵砲玉のやうに今朝びよいと飛び出したまんまで、まだ歸らないんだもの、まアこの忙がしい中を何處へ往つたんだらう、じれつたい」

「困るねエ、他人の事ぢやアなし、いくら何でも今日は居てくれないと、全體、常ちやんが悪いよ、なぜ出ないやうにして置かないの、妾だから構はないが、もし今にも旦那が來てさ、稲田どうしたと言はれて御覽、あんまり宜くないよ」

「だから妾、内々で、どんなに氣を揉んでるか、實は神田の下宿屋へも人を遣つて見

たの」

「神田にも居ないの」

「まさか今日は、銀行へも赤阪の御本宅へも、ねエ」

「行かないとも、現に今、妾が銀座の勸工場から出る時、ちらと旦那の俵を見掛けたからね、もし來られてはと思つて、いふのさ」

「どうしませう」

「どうするツて、しようがないから、まア、うツちやつて置かさ、しかし常ちやん、今日こそ少し眞面目になつていふが宜いよ、今までと違つて一家の主人になるんだもの、あれぢやア世間が通らないからね」

「いひますとも、いはないで置くもんですか、今日こそ妾、もう大丈夫だから喧嘩腰で喰ひ付いて見るワ」

「ほ、ほ、世帯の持ち始めに、夫婦喧嘩の序幕も宜いね、ほ、ほ、ほ、」  
 いよく大略の世帯道具を整へし其日の夕方、いづこよりか飄然と歸り來りし一作、  
 せめてバケツの一個でも提げて來るかと思へば、自己の肩より生えた腕さへ面倒けに  
 懐手のまゝ満面の微笑、

「どうだい、もう買物は揃つたかね、いよく明日の朝から這入れるかね」

お歌は呆れて無言、小常は待ち受けし喧嘩腰の拍子ぬけ、これが曾て巡查の家に五日  
 越の食客を極め込みし時、いはれぬ先の拭掃除、飯炊から靴まで磨いて、世間普通の  
 下女下男二人前以上を半日に働かし横着ものなり、

家を持ちて後に妻を迎ふべきものか、妻を娶りて後に家を持つべきものか、それは儲  
 置き、稻田一作は家と女房を一時に持ちぬ、

もし事情を知らぬ他人の目より見れば、どうした拍子の瓢箪から互に心の駒が狂ひ出  
 したやら、神田の下宿屋に居りし書生あがりの風來坊と、人の妾宅に食客せし厄介者  
 と、雙方こゝに出来合の俄世帯なり、  
 本人の小常まだ今更ら借家の世帯道具と共に運び込まれし我身ならねど、これまでと  
 違つて新たに一家の世話女房となれば、さて何とやら急に嬉しく恥づかしく珍らしく、  
 まごご馴れぬ臺所に狼狽へて房州出の下女に笑はれ、うろく用なき門を出這入し  
 て近所の目に怪しまれ、いそく同じ座敷を幾度か走り廻りながら箒を手を持ちて、  
 わしが國さを踊るが如き手拭の姉さん被り、布ざらしの玉川に等しい襷掛け、近江の  
 お兼を舞ひ出すかと思はるゝ片袖からけて眞白き足を爪立てし風情、あまり意氣に仇  
 ツほく、どうしても素人の女ではなし、  
 一作、縁端の柱に脊を凭せて大胡坐の腕を組みながら、つくぐと打守りぬ、

「おい、おい、先刻から黙ッて見てると、まるで檻を放された狂氣のやうだね、用もないに出たり這入ッたり、全體、何をしてるんだい、第一また幾度この座敷を掃くんだよ、つい一時間ほど前に掃いたぢやアないか」

「用があッても無くッても妾の勝手ですよ、幾度また掃いても宜いちやアありませんか、掃けば掃くほど段々、綺麗になりますよ、ぐづく口を出さずに居て下さい」「ぐづく口を出す理由ぢやアないがね、過ぎたるは及ばざるが如しで、さう一時に幾度も掃くと、却ッて覺の目から塵埃が出るばかりだよ」

「まア蒼蠅いことね、どうせ出る塵埃なら掃き切ッて仕舞ッた方が宜いんですよ、いちく、妾の役目に彼是いはれちやア困りますね」

「は、女といふものは始末に終へないね、今までの乃公に對しては、只これ戦々競々として一事一言びくくして居た女が、急に家を持つてから強く力み出すよ、

そろ／＼圖に乗ッて乃公のいふ事を蒼蠅いなんかと吐すわい、はッはッはッ、しかし一人前の世帯女となるには汝、まだ／＼修行が足りないぜ、何だ、その姿態は、それが一家を構へて満足に拭掃除の出来る鼻アに見えるかい、手拭を頭へ被ッて襷を掛けて裾を端折りながら手に箒を持った工合、いかにも氣が利いて、さも忙がしさうだが、まだ何處やらに御座敷の演藝的を放れない點があるやうだな、や、大變な鼻アを脊負ひ込んだよ、これから仕込むには、なか／＼手数が入るわい、まるで華族の姫様を貰ったと一般だ、はッはッはッ」

一作、縁端の柱に脊を預けて身を支へ、組みし兩腕を屈めし兩足の膝頭に持たせながら、をり／＼目を閉ぢては開き、また開いては閉ぢつ、何をか思案の體、いつしか上野の森を斜めに掠め來る初夏の夕陽、ほッと薄赤く軒端の屋根裏を染め出しぬ、

「今まで臺所に下女を相手として、實は人知れぬ内々の教師として、頻りに立働さし俄修行の小常、否お常、さも手柄顔に入り来りて片頬の笑渦、水の垂るゝが如し、

「おや、また良人、そこに何をして在らッしやるの」

「ちよいと考へてる事があるんだ、無駄口を聞くな」

「無駄口は聞きませんが、もう時刻ですから夕御飯が出来ましたよ、今すぐ召上りますか」

「いや、もう少し後刻で食はう」

「同じことで、今喰べて下されば宜いにねエ」

「食ひたくない」

「だッて折角、妾が、始めて炊いた御飯ですからさ、案外よく出来ましたよ、ほゝゝほゝゝゝゝ」

「汝が炊いたア、そいつア猶更ら以て今すぐに食ふ氣が出ないよ、どうせ満足な飯になツちやア居まいからね」

「さう良人、馬鹿にしたもんぢやアありませんよ、いくら妾だッて一二度、加減さへ手に入れば御飯ぐらゐる炊けますさ、どんな工合か、まア兎も角、喰べて見て下さい」

「よし、ぢやア乃公の考へかけた事は後にして、汝の炊いた飯を先に食はう、菜は何だ」  
「酸の物、差配の世話で廻ッて来た魚屋に、新しい赤貝がありましたからね、酸にしましたよ」

「なか／＼洒落れてるね、かういふ不馴れな新世帯だから手数の入らない佃煮か罐詰の筈が、酸の物とは洒落れてる、異だね」

「それも妾の、手料理ですよ」

「こりやア恐れ入ッた、飯も炊き菜も出来るといふ調法な鼻アは、さう世の中に澤山

ないもんだぜ、いかなる幸運ぞや、これが亭主たるもの大に感謝すべしだ、はッはッはッ、實に便利な女房を持つたわい、世間一帯どこへ向ッも誇るに足るね、はッはッはッ、

「もう妾、喰べて貰はなくッても宜しい、どツか好きな御馳走のある料理屋へでも出かけて下さい」

ぷいと立ッて行く後姿を、ちらとも見送らぬ一作、また其まゝの目を閉ぢて腕を組みながら何をか思案の體、利那の一轉に殆ど別人の如し、

されどお常は其まゝ捨てゝも得置かず、ぶりくししながら無言に夕飯の膳を運び出せば、一作、また忽ち寂寞たる靜思中より物を破るが如く笑ひ出しぬ、

「はッはッはッ、やはり乃公が可愛いと見えるね、どうしても汝、この御亭主に惚れてるぜ、はッはッはッ」

一作そのまゝに坐も動かさず、お常が運びし夕飯の膳に對ひながら、なほ暫し何をか思案の體、やがて茶碗と箸を手取るや否、一碗の飯は例の大口たゞ二三度に盡きたり、

「おい、飯だ、飯のかはりだ」

お常、わざと障子を隔てゝ音なし、

「おい、あとの飯をくれないか、一膳飯の出しッ放しは酷いよ、給仕しなくッても宜いから飯櫃を此處へ出して置け、はッア、あまり乃公が譽め過ぎたから怒ッたね、おい、おい」

呼べども答へぬお常、そツと障子の隙間より差覗けば、そのまゝ箸と茶碗を下に置いて、また頻りに腕を組みながら何をか思案の體、

これほどの人が、これほどの思案、さては人知れぬ心の底に、よくくゝの事あればこそ、さうとも知らで女氣の淺ましく馴れ過ぎて、いかに夫婦とはいへ、すまぬ我身の

我ま、と思ひしが、なまじひ今更ら思案の半に出ては却ッて蒼蠅かるべしと、俄に氣を揉み出せし哀れさ、障子越に飯櫃を抱へながら、いぢらしや立ッたり居たり、一作、飯の事を忘れて、そろ／＼縁端より這ひ降りながら、まだ庭下駄も庭草履もなければ、徒跣のま、草の上を彼方此方と歩み出しぬ、歩みながら、をり／＼立停りて猶も思案の顔色、樹間を漏れ來る夕陽に照らされて、元來の醜男、面は赤黒く目ばかり白く光る大兵の物凄さ、なるほど色白優形の小男が鼠の如く、ちよろ／＼と駈け廻るよりは惚れた女の身に取ッて、いかに嬉しく心丈夫に思はるゝやら、お常、何を的ともなく手を合して自己が冥加を拜み良人の行末を祈りぬ、

折しも築地のお歌、わざと庭傳ひに入り來りて、かくと見るや否、

「おや稲田さん、何をして在らッしやるの、まア徒跣でさ」

またもや利那に一轉の一作、は、と笑うて背後を指さしぬ、

「あの通り膳の出しッ放しで夕飯も満足に喰はしてくれないんだ、おまけに徒跣で庭へ突き落された始末だ、萬事この家が出来てから急に強く力み出して困るよ、幸ひ里方になッてる君だぜ、よく言ひ聞かして貰ひたい、かう残酷な取扱ひを受ける筈ぢやアなかつたにさ、どういふもんだらう、はッはッはッ」

庭より這ひ上りし一作、またもや夕飯の膳に向へば、お常いよく出場を失うて、そツと障子の影より無言に押し出す飯櫃を、目に首肯いて引取りしお歌、給仕しながらの微笑、

「稲田さん、お膳の出しッ放しも酷いが貴君また御飯の喰ベッ放しで、うろ／＼と庭に何をして在らしッたの、今までと違ッて少しは一家の主人らしくなさいよ、當ちヤンには妾が十分、小言をいひますから」

「や、よく言ひ聞かしてくれ、いくら乃公が主人らしく眞面目にならうと思つても、彼女が一家の鼻アらしくならないから困るよ」

「ほ、ほ、雙方お互様でせう、しかし家が出來た以上、いつまで雙方お互様では、いけませんね、やはり貴君の方から主人らしくなされば、自然、また鼻アらしくなり  
ますよ」

「だがね、一生懸命は恐ろしいもんだぜ、この飯は今日、始めて彼女が炊いたんださうだよ、この赤貝の三孟酸も自分の手料理といふこつたが、ちよいと食へるぜ」

「ですからさ、世諺にいふ女房は亭主の持ちやう次第、貴君の仕向けやう一事で、どうにもなりますよ、こんな時は例の毒口を叩かずに譽めておやんなさい、さうすると本人は夢中に嬉しがって、猶更一生懸命に御注文通りの鼻アらしくなりますよ」

「ところが彼女、うっかり譽められない、實は譽め過ぎて、飯櫃お取上げの厄を蒙つ

たんだよ、越後獅子の唄の文句から針仕事だけをヌキにして、凡そ世の中に飯も炊いたり水仕事、おまけに菜も出來るといふ調法な鼻アはさう澤山ないぜと譽めるや否、ぶいと怒つて仕舞つた」

「そりやア貴君、怒りますよ、冗談半分の陽氣浮氣で世帯を持つた理由でなし、本人に取つては生涯の身の落着ですもの、かはいさうに貴君、わざ／＼何も越後獅子の文句で譽めなくつても宜いちやアありませんか、ほ、ほ、第一また馬鹿々々しい、それが譽めた言葉になりますかね」

「は、ほ、ほ、時に日暮前の今ごろ、この草深い谷中へ築地／＼だりから何の用だね」

「いち／＼貴君のいふ事には角がありますよ、まるで妾が借金取にでも來たやうですねエ、ほ、ほ、いくら草深くつても山中の一軒家ぢやアなし、夕方でも朝でも貴君に御差支のないかぎり、妾の勝手ですもの」

「なるほど」

「なるほどは儲置いて稲田さん、實は旦那の用で來ましたの、つまり將來、旦那と貴君の間に絶えず何か、いろくくと御相談があるんでせう、それに就いて是非、電話と自用车がなくツちやア困るんです、貴君の方でなく旦那の方で困るんですよ、かういふ工合に餘計な念を入れて話さないといけない貴君だから、手紙や使者ぢやア無効、もし言ひ損つても直ぐに取消の出來る妾が來ましたのさ、まッたく手数の掛る人ねエ、しかし稲田さん、どんな善い事を前世でなすツたか知りませんが、不思議に貴君ア徳人ですよ、妾の口から申しては變ですが、お金の入る事は一切、旦那の受持で、連れ添ふ女房は生贖を取られても構はないといふ惚れやう、それで貴君ア別に嬉しさうな顔もせず、全體まア何が不足です、三月前の貴君は丸洗ひの布子でしたよ」

一作、靜に首肯いて、額越の兩眼、ぎろりと光らしぬ、

「なアに賣買にすりやア、まだ乃公の賣値は廉いよ、買ツた奴こそ徳人だ」  
 お常は心に謝罪りながら出端を失うて障子越に氣を揉み、幸ひ訪ひ來りしお歌の給仕に悠々と夕飯を喰ふ一作、食ひ終りて箸を放せば膳を押遣り、すぐに身を横へて、ごろりと寢轉びぬ、

「すまないねエ、これまで随分、いろんな人間にも出逢ツて來たらうが、まさか、かういふ露骨の無禮な奴には出喰はすまい、加之も今は都下に聞えた銀行家の寵を受けて殆ど浮世に何の求むるところもない女だ、それが不思議に嫌な顔もせず、よくまア乃公のやうな手数ばかり掛ツて張合のない不節調に出來た亂暴もんの面倒を見てくれるよ、實ア感謝してるぜ、彼女のみでなく、この一作も姉の氣がするよ、實際また年齢にしても二十七と二十九だから、あかの他人の心持がしないとすれば、



つまり姉だね、は、は、は、は、どういふ縁か、血も分けずに厄介な弟を抱へたも  
んだ」

お歌、わざと身を縮めながら小膝を退いて目を見張りぬ、

「あら、うす気味の悪い事、いつも毒口は聞き馴れて平気ですが、だしぬけに貴君のやうな人から、お世辭をいはれると何だか怖くなりますよ、こんな馬鹿正直な姉にうかく、そんな恐ろしい弟を持つて堪りますかね、は、は、は、」

「こりやア酷い、まるで強盗を弟にしたやうな口吻だな、しかし冗談ぢやアない、實際の感謝だ、有難く思ッてるぜ」

「さう有難く思ッて貰はないでも宜しいから、感謝せずに置いて下さいよ、だしぬけに有難く思はれたり感謝されたりすると妾、妙に不安な気がして、こゝに一人で坐ッて居れなくなりますよ稻田さん」

「や、ますます酷い事をいふよ、やはり乃公は持つて生れた無遠慮で毒口を叩いた方が宜いかね、どうしても人間相應かね」

「無論ですよ、貴君は稻田さん、それが貴君なんですぜ、どこまでも例の調子で、きびくとした、お株を押し通すところに貴君の價值があるんですよ、その貴君が今更ら變な工合になつて、性格にもない妙な柔かみを持つたり、第一お世辭をいふやうぢやア妾、まツたく貴君のため惜しく思ひますワ、折角の男に出來てる貴君が潰れますもの、もし貴君に男の出來が缺けて御覽なさい、失禮ながら其お顔で、その貧乏で、差引勘定、さうくしいだけの残つた貴君を誰が貴君とするもんですか、いくら風の變つた好奇心の常ちやんだつて、あ、はなりませんよ、妾なんかア猶更ら物をいふどころか、見るのも嫌ですワ、は、は、は、」

「もう宜からう、は、は、は、もう澤山だよ、その邊で措いてくれ、相變らず君も其調子

を缺いちやアいけないぜ、やはり乃公と同じ畑の生物だ、は、は、は、女としては兎も角も面白い人間に出来てるわい、時に木村さんからの用事、電話と自用车の一件だがね、こりやア乃公が直接、木村さんに逢って話さう」

「常ちやん、どうしたの、なぜ顔を出さないの、妾一人では困るよ、さんざ無駄口を訊かされて肝心の用になると、まるで相手にされないから」

午後四時を過ぎて五時に近く、時間外に用なき行員いづれも歸りて、其日の宿直と小使のみ残れる關東銀行の重役室に、入口の戸を閉め切りし木村周藏と稻田一作、加之も今日は眞面目の一作なり、

「自分の一身としては無論、下宿屋の支拂も覺束ないのが當然で、まだ迎も家なんか持つべき力もなく必要もありませんが、お言葉に甘へて既に其家を持つた以上、つまり藝をする猿に衣裳を着せる理由で、なるほど電話も入りますな、しかし木村さんあまり分に過ぎた不相應な境遇を作つて下すつちやア、却つて活動の鈍くなる恐れがありますから、自用车だけは御免を蒙りませう、なアに電車の回数券で澤山です、だか今日の社會、この分に過ぎた境遇を貴君のやうな金穴もなく第一また例の如き必要もなく、たゞ自分の虚榮心から無理に作り出す自縄自縛の馬鹿が多いやうですな、苦しい筈だ、は、は、は、もしこれを人生暗憎の或方面より見れば直ぐに埒のあく一時の鐵道往生や首吊と違つて、最も苦痛の長い最も拙劣な自殺法ですな、は、は、は、食ふや食はずの落魄に就いては幾度の經驗上、元來この蠻的の獸身ですから、さのみ感じませんでしたが、寧ろ今この過分の境遇を俄に作られて、や、大に得ましたね、好い學問をしましたよ」

沈めば上に向うて屈せず、浮べば底を見て驕らず、何事も現在の反対方面より一種の眼光を放てる言葉に、木村周藏ますます頼もしき心地、

「失禮ながら君の容貌態度風采、どう見ても所謂東洋流の放浪的で、さういふ秩序のある志慮を持つてゐる人とは思へませんな、お世辭でない、實際感心しますよ」

「いやお世辭でなくとも當分、この一作を割賦に譽められちやア困りますよ、しかし木村さん、例の一件を仕上げた曉は、おツかぶせて此方から蒼蠅く自慢しますぜ、はゝゝゝ」

「無論です、願はくは閉口して逃げ廻るほどの自慢をして貰ひたい、時に稻田さん、例の會社も、いよくこの七月の決算期が生死の境目ですから、もはや四十餘日の生命だ、それまでの間に十分、やツて下さいよ」

「よろしい、甚だ潜越ですが、確實に承知しました、こゝ五六日を過ぎて、そろく

實地に手を付けますから、たとひ如何なる方面より如何なる不意の出來事が湧いて來ても、あくまで一作を信じて、不肖ながら一作の存在するかぎり、なるべく冷かに、なるべく靜に、つまり或時期まで殆ど關せず焉の態度を取ツて戴きたい、なアに萬一やり損へば三策中の下策で、誰も文句のいへない死骸にして仕舞ツて無事に立派な葬式を出しますよ、決して見苦しい屍を世間へ曝しませんから御安心下さい、普通の俗間では少々まだ通りませんが、借金も財産の部です、空しく金庫にある現金と他手に渡した借用證文と、いづれが信用の代價になるといふ點まで漕ぎ付ける覺悟です、むかしの世諺に槍持は槍を使はず金持は金を使はずといふ警句がありますよ、はッはッはッ」

三月以前は日比谷公園のロハ臺に二日越の空腹を抱へて窪める眼に的もない空を眺め

し一作、實は木村周藏のため或方面に於ける代理者としての必要上ながら、依然たる素寒貧を以て今こゝに見苦しからぬ家を構へしのみか、妻もあり電話もありといふに至りては、窮達消長、なるほど人間は運命といふものは指頭に自由自在の廻轉物なり、

いよく電話を架設せられし其日の開通第一番にチリンくと響けば、折しも膝を枕に寝轉びし一作、おもはず舌鼓を打ち鳴しぬ、

「ちよッ、面倒だなア」

やうく身を起して電話室に入りぬ、

「どツからです」

「谷中の稻田さんですか」

「左様、あなたは誰です」

「はい妾、築地の歌ですよ」

「は、君かい、始めて電話で聞くと、わからないね、不意に女の聲で誰かと思つた、何だ、木村さんの用かね」

「い、え妾の用なんです、常ちやん、居ますか」

「居るよ」

「今、何をして居ます」

「おい、よしてくれ、つまらない彼女に用がありやア彼女を呼んでやるからね、すきな談話をするが宜い、全體まア何處から掛けてるんだ」

「妾の家からですよ」

「君の家に電話アない筈だが」

「今日かゝりましたの、旦那がね、外からちやア猶更ら銀行や本宅からでも困る事が

あるからって、貴君の方と同時に架かったんですよ、おかけさまで、しかし稻田さん便利ですわねエ」

「こりやア驚いた、木村さんと乃公の間は兎も角、君に對して大に閉口するよ、あまり便利過ぎて蒼蠅いよ、谷中と築地で道が遠くなつたから有難いと思つて居たに、これぢやア何にもならない、以後は急病でもある外、一切この乃公を呼び出さない事にして貰ひたいね、切るよ、さよなら」

そのまゝ元の座に寢轉べば、また忽ち引續いて頻りに鳴り響きぬ、

「や、うるさい女だな、喧しくつて困る、おい汝、出ろ」

お常、待ち受けて走せ寄りながら耳と口、

「今度は妾よ、はア、さう、すみませぬエ、なアに今ね、まだここに居ますの、寢轉んで」

一作、鎌首を擡げぬ、

「馬鹿、よけいな事いふない」

お常、振り返りもせず、

「吐られたよ、ほゝゝだつて、まさかね、さうもならないワ、ほゝゝ何々、もう少し大きい聲で、はア、はア、わかつてよ、ぢやアお互に用がなくつても一時間毎に掛けませう、しかし夜は御免よ、これも雙方お互様、ほゝゝ」

一作、寢返りながら獨言、

「お互様に能く揃つた女等だ」

このごろの一作、頭脳は絶えず働けど身體は常に閑散の境遇、その閑散の身を置くに一箇月二十五圓の借家は過ぎたれど、その頭脳を養ふに眼界三十坪内外の庭は頗る不

足なり、

幸ひ谷中の清水町より五月の末の青葉續きに遠くもない上野の山こそ、時に取って我々に與へられたる自然の大庭園、こゝに鬱蒼たる大木を見上げ切株に腰うちかけて腕を組めば、吐く息も清く吐く息も清く物に迫らず事に觸れぬ心氣爽快、目に俗物なく鼻に悪臭なく耳に車馬なく四邊に人なき天地清淨、東京市中いづこよりも僅五錢の電車に運ばれて眼前かゝる無上の沈黙考所ありながら、その敵中を脱し得ず同じ事務室の片隅に青くなつて戦々兢々たる奴、たゞさへ頭の上らぬ低き天井の下に半死の如くなりて考へ込む奴、乃至また壁一重を憚る待合の奥座敷に額を鳩め膝を交へつゝ、私語低聲に小田原評議の密談する奴、あはれに馬鹿けて皆これ腦裡一轉の機を知らず心配の仕場所を知らぬ奴なり、

最も激烈なる優勝劣敗の策謀は最も閑寂なる自適悠々の間に生る、最も奇警を要する

苦心慘澹の難事は最も塵埃を避けし樹木泉石の間に生る、事いよく迫れば我ますます迫らず、熱度の極は冷度の極を以て對す、満を持して殺氣を含める軍容こゝに旌旗また動かすと、人知れぬ自負心と自信力に溢るゝ一作、おもはず微笑を漏らしながら歩める背後に聲あり、

「稻田君、稻田君」

振り返れば一個當世ハイカラの看板男、例の汽車中で出逢ひし舊友の小池なるもの、例に依つて例の如く金縁眼鏡に金鎖に金指輪に金齒の金づくめなり、

「稻田君、どこへ行く、先日は汽車中で失敬したね」

一作、立停りて満面の苦笑ひ、

「やア小池か、相變らず光ッてるな、さぞ懐中も光ッてるだらう、どうだい過日、新橋で貸しッ放しになつてる洋食を、今日この上野で奢らないか」

「奢らう、奢るがね、實は今、仙臺へ行く友人の送別會で、加之も幹事でね、やツと精養軒を出たばかりだよ」

「は、は、いつも都合よく、お生憎様に出來てる男だな、ぢやア腹減らしに二三時間この邊を、ぶらついてから、どツか手軽に飲まうか」

「それも宜からう、時に君、稻田君、君は谷中の清水町に住んでるんだね」

「ふん、どうして知ってる」

「知る理由があるよ、過日、汽車で逢った時は實際、さうなってる君とは思へなかつたが、驚いたね君、なか／＼盛んだな君、失敬ながら案外だよ、君が家を持って電話を引いて」

「何が案外だ、電話ア車賃と時間の儉約だ、家は蜂でも逆さまに巢を作るぜ、はッはッはッ」

花と共に春を呼びし一時的の葭篋張は去りて、青葉と共に残る半永久的の茶店にコーヒを啜りながら、金づくめの小池と苦笑ひの一作、

「は、ア電話帳で乃公の家を知ったんだね、なるほど當座の便利以外、或意味に於ける自己の存在を認めらるゝには最も簡便な道具に出來てるわい、つまり電話と自動車があつて所得税さへ出せば、今日の世の中、いはゆる紳士なるもの、條件が具備する理由だな、や、紳士會社の株券も下落したもんだ、お易いこつたね、は、は、は、」

「しかし君、家に電話があれば兎も角も、今日の中流以上だよ、實は過日、不意に汽車で逢った時、失敬ながら稻田君、まだ君を一個の放浪生と見て居ったぜ、現在また君の口からも、さういふ言葉だったからね、全體、何をしてる、目下」

「無職業」

「無職業で電話の必要ありとすれば、職を得て生活難に苦しむもの多い今日、猶更

ら以て君の手腕に敬服せざるを得ないね、だが世間普通の解釋で當今の無職業は讀んで字の如くでない筈だから、いづれ何か、うまい事をしてるだらう、永らく絶えて居たが、舊友の僕には祕さずとも宜からう、稻田君、どうだね」

「は、は、は、過日の汽車中と違つて、酷く今日は君、お世辭が宜いね」

「いや、冗談は儲置いて實際、我々が學生時代の舊友中で今日、電話のあるなア百に對する六か七の割合だぜ、尠いもんだねエ」

「こりやア驚いた、そんな事まで調べてるのか、よく手の届いたもんだね、つまり電話でもある奴だけに實際するんだらう、は、は、は」

「なアに君、さういふ理由でないが、たゞ電話で比較的、昔の記憶を深く喚び起すと共に、従つて自然その人間の境遇も想像し得るのさ、現に君だつて近來まで、うち絶えて何處に居るか分らないぢやアないか、それが君、新たに電話が架つたから始

めて居所分明、また君の健在を知るんだ、強ち電話の有無を以て人格を左右する理由ぢやアないがね、結局、事が早いよ」

「ありがたい、この稻田も只これ一個の電話を架設したがため、君の記憶を喚び起して百分の六七に當る人間となつた、實に名譽の至りだ、は、は、は、時に君、家が分つた以上、をりく遊びに來給へ、別に御馳走はないがね、君に見せたいよ、美しい鼻アを持つてるぜ、電話よりは儘に高價物だ、はッはッはッ」

そのまゝ茶代も置かず、出して置いてくれともいはず、後も振り返らず飄然と立出でし一作、過日の新橋も今日の上野も最後は小常の惚恍を浴せかけて、こんな奴には實際これで澤山といふ料簡、歩みながら思ふやう、もし不意に手紙を出しても返辭をすべき筈でない彼奴が、わづか電話一個のために俄に我と舊交を暖めたき面相、なるほど案外に與し易き世の中なり、



無言のまゝ飄然と出でて無言のまゝ飄然と歸りし一作、庭に對へる机の上に頬杖を突き立てながら、どこを見てもなく茫然たる體、もしこれで身體衰弱の青瓢箪ならば肺病の恐れあり、もし精神に異狀あれば頗る危険の兆候なれど、實は水火の底に投げ込んでも跳ね返る奴なり、

いづれ世間普通の鑄型に外れた良人と、お常も近頃は馴れて不思議の眉も顰めず、片頬に笑渦を浮べながら熱き番茶を汲んで差出しぬ、

「どこへ往らしつたの、黙ッて」

差出す番茶を一口、ぐいと呑み乾しながら、こゝに始めて振り返りぬ、

「ぶらく上野へ往ッて来たよ」

「おや上野ですか」

「宜いぜ此頃の上野は、つい其處だから汝も用のない時、ちよいく出掛けるよ」

「だッて今ア、花も何もありませんまいに、第一また用がなくツても妾、かうなッてから氣にかゝッて、さう手軽く出られませんわ」

「なるほど、一家の要で在らッしやるからなア、はゝゝゝしかし汝、さう急に世帯じみて手重く立籠らなくツても宜いよ、まだ臺所の隅で繭を作るには聊か早いよ、人間の生涯は短いやうで長いからね、當分まア心配なく氣樂に暢氣に暮すが宜い、家とはいふもんの元來こりやア他人のため或都合上に出來た一時的の假小屋だ、幸ひ喰ふと着るに差支のない今のうち十分に身體を養ッて置いてくれ、いよく乃公が改めて家を持ッたとなれば、どうせ苦勞をしなきやアならない汝だ、また上野は花よりも青葉に限るぜ」

「あら、この家を此まゝ良人、つゞけて持たない心算ですの、なアに妾の苦勞するの

は、どんな事があつても構ひませんがね」

「こりやア木村のため一時、ある方便に餘儀なく持った家だよ、無論この家で五年や七年このまゝ遊んで暮しても、さらに疾しくないだけの活動はして返す筈だがね、それぢやア男として面白くない、たとひ貧乏しても難儀しても他人の世話にならず自分は自分で氣持よく生涯を愉快に暮したいのが人間の希望だ、考へて見ろ、餘所の廂で禮を言つて雨を凌ぐよりやア破れても自分の家で月を眺める方が宜からう、乃公に連れ添つた以上、乃公の通りになれよ」

「なりますとも、お隣りの屋敷から馬車が出たつて妾、平氣で味噌こし筈を提げますワ」

「よし、そこだ、その覺悟だ、まさか馬車の出る隣屋で味噌も買ひに遣らないがね、そこが乃公の嗅アだ、情で泣いても貧乏で泣くなよ」

「はい」

「身體に苦勞は、さすかも知れないが、心に苦勞は、ささないからね、氣を大きく安心しろよ」

「はい」

「もし間違つたところで、一箇のものを半分づつ割つて食やア生命に別條もないだらう、はゝゝゝ」

「いッそ妾、早く、さうなれば」

「馬鹿、早く、さうなつて堪るか、その料簡で今より、ずつと圖ぬけて、よくなるンだい」

一日の朝早く立出でし一作、正午前に歸り來りて机の上に置きし二品、

「おい、土産物を買って来たぜ」

言葉を残して廁へ入りし後に、お常その品を見れば、いづれも古新聞に包みて、丸く柔かきは菓子をやうなれど、手觸り固く長方形に隙間なき小粒の動くが如きもの、思はず小首を捻れば、廁より出でし一作、笑ひながら一包の古新聞を解けば果して菓子なり、

「これは汝の分だ、前夜、茶を飲んだ時に何か菓子が欲しいと言ったね、この御亭主すぐに心得て買って来たぜ、菓子も甘い乃公も随分、鼻アに甘いところがあるなア、は、は、は、これか、こりやア食物でない、かういふ品だ」

巻き付けし古新聞を破れば一挺の算盤、

「どうだい、世の中も段々と變つて来て、人間の境遇も種々になるもんだぜ、ちよいと見ればダイナマイトか仕込杖でも入用らしい面相に生れた、この乃公に算盤といふ

對照物が面白からう、は、は、は、實は小學校で加減乗除を習った外、加之も一度は落第してね、それツきり今日まで手に取った事のない算盤球が、不思議の縁で妙な工合から餘儀なく買って来たよ、はッはッはッ、しかし算盤といふ奴、學理的に傾いた算數術としては殆ど世に後れた舊式の廻り遠い品だが、儲いよく實際の頭腦から割り出す利害得失の指針で、この單純な珠を一個、ぱちりと弾けば百萬の金も人間の生命も忽ち飛んだり消えたりする恐ろしい器械だ、この算盤め、買って来た代價は僅二十八錢で、すぐに喰って仕舞へる其菓子より廉い品だが、稻田一作の將來に對うて、どう動いて来るかね、考へて見ると薄氣味の悪い奴だ」

お常は算盤と一作の顔を等分に見詰めて、思はず笑ひ出しぬ、

「ほ、ほ、ほ、また良人、妾に分らない妙な事を言ひ出してさ、ほ、ほ、ほ、しかし眞實です、ねエ、良人の買物に算盤は案外ですワ、よほど飛び放れた不似合の品ですよ、朝か

「ら晩まで其音ばかり聴いて在らッしやる木村さんなんかの目から見りやア、良人に算盤、さぞ呵しいでせうね、ほ、ほ、ほ」

「いや、年が年中、朝から晩まで耳に聴き馴れて手に入ッた木村の弾き損ねたところを、この乃公が弾き直してやるんだよ、はッはッはッ」

生きて動いて我に迫り来る同じ人間の仕業なれば、いかなる大敵が如何なる利器を持つて刃向ふとも、さらに屈せず驚かず平氣に受け流すべき一作ながら、小學校の昔に何の氣もなく習ひ覚えし一挺の算盤は、今日の一作として爆裂彈を眼前に置けるが如く、思はず顔を顰め腕を組み始めぬ、

「此奴、なかく悪堅く馬鹿正直で人の自由にならない奴だが、平生、絶えず手觸り馴れた指頭と違ッて、觸ッた事のない乃公の指頭で不意に弾き出せば、流石の算盤

め驚いて面くらッて、少々間違ッた無理な勘定ぐらゐるは、ごまかせるだらうよ、なア常ばう、どうだい、は、ほ、ほ、ほ」

大きく見れば五體の急所どこにあるやら分らぬ男、小さく見れば眞面目と冗談の境目どこにあるやら分らぬ男、どうだいと問はれしお常、どうと返辭のしようもなく笑ひ出しぬ、

「いくら算盤が間違ッてくれても、さう良人、うまく世間の勘定が間違ッてくれませんわ、ほ、ほ、ほ」

「ところが案外、世間といふものは間違ひのない實際の總勘定より、聊か間違ッて居ても手に取る事の早い眼前の算盤珠で承知するんだ、なアに乃公が巧く弾き出すよ、は、ほ、ほ、ほ、や、時に誰か来たやうだぜ、立關の格子が開いた、おい、出て見ろ」をりしも臺所より下女の聲、

「御新造様、お客様」

お常、急いで行きしが、やがて立戻りての小聲、

「ついに見馴れない方ですよ、大變なハイカラで、小池さんといふ方が、是非、良人

にと」

一作、算盤の机の下に入れながら、面を皺めて苦笑ひ、

「は、ア、いよく本氣に遣ッて來たな、うるさい奴だ、目鏡も前齒も指輪も時計の

鏈も、金ぴかりに光ッてる男だらう、そりやア小池喜太郎と言ッてね、古い昔の學

友だが、近ごろ二度ばかり逢ッた嫌な野郎だ、しかし通ッしてやれ、實ア過日、上野

で乃公の鼻アを見てくれと自慢したから、わざく、汝を見に來たんだぜ」

「あら、良人、ふざけては困りますよ、妾、出ませんよ」

「折角、青山くんだりから見に來たんだもの、穴のあくほど見せてやれよ、しかし野

郎、色の生ツ白い奴だ、惚れちやア不可ないぞ、先方には鼻アがあるさうだからね、  
は、は、は、は、

一作は坐も動かす其まゝの大胡坐に額越の目ばかり輕き會釋、さりとして此男の一徳、

これが人に對して、さのみ無禮とも目立たぬが不思議なり、

「やア小池、いよくやつて來たね、は、は、は、は、」

小池喜太郎は萬事あくまで當世のハイカラ式、うるさけれど本人得意の金縁目鏡に四

邊を見廻し、カイゼル髭の下より半笑ひの金齒を現はして、金指輪の光る指頭に時計

の金鏈を弄びながら、色白の優形に赤きネクタイの配合いかにも若々しけれど、實

は一作より今年二歳も上なり、

「過日は上野で失敬したよ、なるほど稲田君、なか〜くい家だね、庭もあッて、第

一この垣根越の青葉つゞきに上野の森の見えるところが價値だ、まるで晝だな」

「この高價な畫が乃公のために無代だぜ、加之も晴雨朝夕、机の上に頼杖を突きながら自由に見るんだ、これから考へると近來の繪畫共進會とか美術會とかいふ駈出繪師の彩ツたものへ、わざ／＼錢を出して歩を運んで見に行く奴の氣が知れんね、しかし家よりも庭よりも上野の森よりも今、取次に出た乃公の鼻アの方が宜からう、どうだい過日、自慢して置いただけの事はあるだらう、あれこそ實際の不換金物だぜ、はッはッはッ」

「こりやア恐れ入ツた、は／＼、挨拶に困るね」

俄に脊を丸め首を縮めて振り返りながらの小聲、

「だが眞實、美人だね、想像以上の美だよ、失敬ながら案外だ、どうして君あゝいふ細君を持てたい、よほど君には過ぎてるぜ」

「馬鹿いふない、男は松の大木の亭々たるが如きもんだ、色も香もなくツて立つんだ」

鼻アの方で過ぎた持物だと言ツてるよ、は／＼、時に君、今日は何の用で来たね、絶えて久しい舊友の乃公を訪うて呉れた以外、家と鼻アと電話の有無を見届けに来てくれた以外、どういふ用があるんだ」

無遠慮に露骨に思ふまゝの言葉を吐き出せば、流石の小池も聊か眉を蹙めぬ、

「相變らず稲田君、どうも君は皮肉に出来てるね、なアに別段、用もないが」

「用がない、ぢやア遊びに来たんだらう、遊びに来たら来たで、乃公も大に遊ばう、此ごろの奴は兎角、ずる／＼ベツたりのアヤフヤで困る、有用にも無用にも人間はキビ／＼するもんだ、い／＼遊びとなれば自慢の鼻アも呼んで三人、なるべく面白く遊ばう、おい、常、こゝへ来い、こりやア乃公の古い學校友達で今ア金持になツてる男だ、うまく機嫌を取ると指輪ぐらゐる外してくるぜ、はッはッはッ」

四邊かまはぬ大聲、一作の眼中に小池喜太郎なるものなし、加之も一作の蠻カラに無

遠慮なる高調子、小池のハイカラに氣取れる金ピカ式、お常その間の調和となりて、わざとならず自然に圓く坐を持ちぬ、

「おい小池、見てくれ、萬事この通りの新世帯で、いはゞ夫婦に下女一人の露營的だからね、時刻が来りやア番茶で飯を出す外、芳志はあつても、別に御馳走する事の出来ない境遇だ、がぶ／＼まア茶でも飲んで話さう」

お常、おもはず小池に向うて會釋しながら、振り返りて眉に皺、

「また良人、そんな失禮な事を仰しやるよ、どうせ御馳走は出来ませんが折角、入らしつた方に」

「どうせ出来ない御馳走なら最初から謝るが宜いよ、いくら折角来たつて仕様がなぢやアないか」

「ちよいと今、何か近所へ取りに遣りましたよ、この田舎ですから、ろくな酒肴はな

いでせう」

「もう取りに遣つたのかい、馬鹿、わざ／＼取りに遣つて何が失禮だ、兎角この女といふ奴は不自然の虚榮動物で、つまらない邊へ餘計なお世辭を賣り出すもんだ、はは、／＼、おい小池、何か今、来るさうだから、まア茶を止め、自分の臍で沸かした茶は面白いが、外で沸かして口から注ぎ込んだ茶腹は頗る感心しないよ、はッはッはッ」

小池の目は絶えず物を偷むが如く、お常の美貌を一作の面に對照して、ますます不思議の顔色、實は羨ましけの嫉妬に堪へざる體、多額納税者の娘といふ自己が妻の持參金を差引いて、いかに何と思ひしか、あはれに一種の淋しき笑を浮べぬ、

「稲田君、實に君は愉快なる家庭を作つてゐるね」

「なアに愉快も不愉快もあるもんか、家は家賃の滞り次第すぐ追出される借家住

居で、身は一定の収入もない素寒貧の無職業で、いはゞ世の中に於ける一時の露營的だから、實際まだ未製品中の家庭さ、しかし夫婦の情愛だけは互に遺憾なく圓滿の極だ、世間の所謂戸籍面を以て唯一の要件とするやうな薄情な交情でないから、そりやア安心してくれ、なア、常」

「は、口では貴君、かう申して居ても、なか／＼安心の出来ない良人で御坐いますよ、勿論この通りの顔ですから、どこへ手放して置いても大丈夫、女の相手は御坐いませんが、本人の氣が貴君、かういふ取止のない暢氣ですもの、いつ何時その時の風工合で行方が知れなくなるかも分りませんよ、ほ、ほ、ほ」

小池喜太郎、ます／＼中てられて、殆ど半泣の澁面を作りぬ、

「稻田君、また其うち改めて来よう、いづれ近口」

「まア君、待てよ、今に御馳走が出るんだぜ」

「まア貴君、ちよいと暫時、お止め申すほどの事は御坐いませんが」

座も動かす聲ばかりの一作には制せられねど、はや中腰に遮るお常のためには、どうしてか此奴、それを掻き退けも得せず、また其まゝ元の小池となりぬ、

近處の仕出屋より取寄せし小料理にビールを添へて、萬事に不揃ひ勝の新世帯なれど主客の間を如才なきお常の愛敬と待遇振、これのみは流石に寸隙もなく手馴れたものなり、

一作は例に依つて例の調子、無遠慮の大胡坐、箸とコップを兩手より放さず、ガブ／＼飲んでムシヤ／＼喰へど、これに對する小池の神経的を含みし習慣性の態度、絶えずネクタイを氣にしてズボンの皺を伸ばし筋目を抓み上げながら、ちび／＼と舐めるが如く飲んで、ちよい／＼恐る、如く箸を下しぬ、

「おい小池、どうしても君は乃公と違つて、物事が小ぢんまりと小器用に出来てるな、



ちよいと食ッたり飲ンだりする工合でも、君は當世式の交際本位で乃公は一切この通り他を顧みない野獸的だ、は、は、は、は

お常は手を振る小池のコップにビールを注ぎながら、軽く一作を尻目の微笑、

「つまり良人ア下品なンですよ、それに第一また我まゝの癖が付き過ぎてゐるからですよ、此方のやうに、少しは世間といふものを考へて下さらないと困りますワ」

「おい、小池、何とか挨拶しろ、君のため鼻アに叱られてるぜ」

小池も思はずお常を振り返りて笑ひ出しぬ、

「は、は、は、いや稲田君は昔から相變らず、この通りの磊落に出来た人ですよ、我々が學生時代の中で一異彩を放ッて、いは、特別待遇を受けて来た豪傑ですからね、は、は、は、は」

「何だ、特別待遇、嘘いへ、實ア乃公を跳ね退け物にしたんだらう、しかし乃公の方

でも實ア君等と同じ鑄型に溶解されちやア面白くないからね、中途で退學して仕舞ツたのさ、は、は、は、學校の鑄型のみでない、現在の今日なほ社會の鑄型にも喰み出して、かういふ不節調な境遇だ、無論、人間の成功も不成功も程度問題だが、まづ世間普通、やはり無事に學校を卒業した奴が怪我もなく、また無事に世の中を渡るらしいね、現に君の如きは其人だ、なるほど多額納税者の娘も嫁に来る筈だ、いふまでもなく持參金があるだらう、全體、幾何ほど脊負ッて來たい」

お常、はツとして頻りに袖を引けど、一作、ますます調子づいて疊みかけぬ、

「川柳といふものは實に世俗を穿ッてるね、その一に曰く、持參金嫁なけなしの鼻に掛け、まだあるぜ、持參金ならば手柄に去ッて見よ、まだあるよ、持參金右同斷の下女を連れ、はツはツはツ君の鼻アは以上のうち、どの部に屬してるかい」

かう出られては流石の小池も居堪まらず、無言のまゝ座を起てば、お常も今更ら引止

める手もなく言葉もなく、たゞ驚いて送り出す背後に一作の聲、

「聊か舌鋒が過ぎたやうだ、うまくお世辭を言ッて送り出せよ」

小池の立去る後姿に、ちらと額越の目をくれしばかりの一作、そのまゝ身を横へて  
肱枕

お常は氣の毒けに見送りて、座に立戻るや否、一作の枕頭に坐り込みぬ、

「まア良人、いくら何だッて、あんまりですよ、酷いにも程度があるぢやアありませんか、あれぢやア良人、すみませんですよ」

「は、は、は、すまないよ、どんな客に對しても相應の禮を施すべき筈だから、すまない

事は乃公も十分、承知してるがね」

「承知して居て何故、なぜ良人、あんな酷い待遇をなさるんです、慌て、送り出した事は出したもんの妾、じつと俯いたまんま暫時、靴音の聞えなくなるまで顔を上げ

ずに居ましたよ」

「なアに彼奴は、あれで澤山だ、ありやア學生時代から嫌にチョコ／＼した氣觸な奴

でね、實ア先月、汽車の中で久しぶりに逢ったのさ、ところが野郎うぬの金ピカと

乃公の風體を對照して金でも借られると思つたんだらうよ、木で鼻を括つたやうな  
挨拶をしやアがる、無論、此方で齒牙に掛けない奴だから、それなら、それで宜い

が、過日また上野で逢つた時は忽ち別人だね、冷熱の早變りも一足飛びの極端だ、  
急に馴れ馴れしく近づいて、頻りに汝、お世辭をいふぢやアないか、はて變だと思

へば、どうだい、乃公の名前が電話帳に上ったからだとさ、は、は、は、

「あら、いやだ事、さういふ人なんですか、たゞ私は何だか蟲の好かない、あゝいふ  
金ぴかりの氣取屋だとばかり思ッて居ましたの」

「その氣取屋も金ぴかりも自分だけで濟めば彼奴、まだ罪も害もないがね、あんな奴

に限って案内、剥けば剥くほど面の皮の厚いもんだよ、うかく、舊友の情とか何とか人間らしい待遇をしかけると野郎、好い氣になつて来るから蒼蠅くてならない、恥を恥と思はない奴に、恥をかいた凡例がないから、よほど手厳しく遣らなきやア無効だ、つまり今日の乃公は彼奴に對して二度と再び来ないよう、絶交的に示して追ッ拂ひ策だ、聊か徹へたと見えて、妙な面アして歸ツたね、はッはッはッはッ」

「誰だツて良人、あ、扱はれて満足な顔が出来ますかね、色が白くツて目鼻立が揃ッてる氣取屋だけに猶更、呵しく變でしたよ」

「色が黒くツて目鼻立の揃はない乃公なら、さのみ呵しくもあるまい」

「ほ、ほ、ほ、冗談は置いて、もし妾が男で彼人なら、あのま、黙ツて無事に歸りませんわ」

「黙ツて歸らない、どうする」

「もう良人、自棄ですもの、すぐ取ツ組合を始めますよ」

「は、は、は、ぶてば泣く女でさへ、さうなるに奴彼、まア何といふ、なさけない意氣地なしだらう、しかし今日の社會は十中の八九、あんな奴が方角も間違はずに歩いてる世の中だ、考へて見ると心細いなア」

## 浪六全集（第廿四編）終

大正十五年十月十日印刷  
大正十五年十月十五日發行

稻田一作

定價壹圓八拾錢

特價金壹圓貳拾錢



著者 村上信

發行者 加島虎吉

印刷者 君島潔

東京市日本橋區本石町三丁目十四番地  
東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所 共同印刷株式會社

發賣所

東京市日本橋區  
本石町三丁目  
東京市日本橋區  
人形町通住吉町  
東京市本鄉區  
本富士町二番地

電 大手一三三六番、六三三六番  
振替東京一七四四番  
電話浪花一九四九番  
振替東京一六三六番  
電話小石川七五〇三番  
振替東京一六九四番

至誠堂書店

至誠堂第一分店

至誠堂第二分店

# 浪六全集

刷縮  
 大衆文藝の先覺者浪六先生の傑作  
 揃い……興味津津たる読物

全四十五卷  
 完成

第一編 當世 五人男  
 第八編 岡崎俊平

第二編 當世 五人男 黒田健次  
 第九編 居家處世 人間學

第三編 當世 五人男 上田力  
 第十編 八軒長屋

第四編 當世 五人男 倉橋幸藏  
 第十一編 八軒長屋(後)

第五編 當世 五人男 川上三吉  
 第十二編 八軒長屋(續)

第六編 當世 五人男 吉田雄藏  
 第十三編 仍如件

第七編 金剛盤  
 第十四編 當世 三人兄弟

第十五編 元祿 名物男

550

57



終